

「声あげ」

Is it true?

物書き うときゅういっき



(続)「声あげ」

Is it true?

うときゅう いっき

- 目次 ●序 ●大切な人々
 - ●野望が生む焦り
 - (続) 野望が生む焦り の曲がり角
 - ●快適さ (amenity)
 - ●快適さ (amenity) 2
 - ●ひょっとして逆?
 - •In front of our restaurant 4
 - ●人質?
 - ●鳥語(人間外言語)
 - ●新説「うさぎと亀」
 - ●お門違い
 - ●私事 臆病故の危機管理
 - ●十把一絡げの害
 - ●経営会議確認事項
 - ●元凶は何?

序

(発端)

今の常識、当たり前、善と思っている事が 却って我々の未来をつぶしていやしないか? という素朴な「疑問」から書いてみました。

追記

本日は目の手術日。

失敗して失明しては困ると思い

「その前に発刊」

と駆け込みで書き上げましたので、多少荒っぽい仕上がりになっております。 ご容赦くださいませ。

大切な人々



以下は全くの私見であり推測以外の何物でもない事をご承知おきの上お読み戴ければと思います。

当店のお客様でウクライナ出身の方が何人かいらっしゃいました。

ある超有名 IT 企業の先端インフォメーションテクノロジーのエンジニアで大方がベジタリアンかベーガンの方々でした。

当店ご来店時にはベジタリアン専用の野菜カリーを takeout されておりました。

その方々が例の国がウクライナに侵攻する一月ほど前に東京方面に纏まって引っ越され、 漏れ伝え聞く処によれば戦う為に母国へ帰ったとの事でした。

しかし自分には是が「勇ましい話」にはどうしても思えませんでした。

何故なら皆さんインテリで体も細く物静かでとても鉄砲を撃つ様には見えませんでしたし 血の気が多い様にも見えなかったからです。

「なのに帰って行った」

のだとすると、それは「勇ましさ」からではなく「自責の念」に駆られた部分もあるのでは

なかろうかと思いました。

国を守るというより

「残してきた家族や友人など大切な人達が大変な目に遭っている。それをメディアで見聞 きしたのに見て見ぬ振り、聞いて聞かぬ振りはできない。

そんな自責の念に苦しむ位だったらいっそ弾に当たって命を落とした方が余程気が楽だ」 と思ったのではなかろうかと。

そして何より

「残してきた家族や友人が苦しんだり傷ついたりする姿をこれ以上見ていられない」 気持ち。

「鉄砲の打ち方は国に戻ってから教わればいい。取り敢えず国に帰ろう。ここでニュースを 見て落ち着かないよりはなんぼかましだ |

自分は今アジア系外国人と日々一緒に仕事をしたり話し合ったりしておりますが出身国や 民族、文化は違っても外国人の中には何かこういった感情が今の我々日本人より遥かに強 く感じられます。

以前の記事で自分が最も大切にしているのは

「義理人情(之図)だ|

と書いて大顰蹙を買いましたが将にこの「古の日本人の専売特許の如き」義理人情を、むし るそれに欠けるドライな人間達とわが国では思われがちな彼らの中に感じております。

但しここでいう「義理人情(之図)」の意味はべとべとズルズルの暑苦しいものではなく 「義理と人情を秤にかけりゃ義理が重たい世の中だ」という際の重苦しさや堅苦しさでも なくもっと科学的な見方を指しております。

つまり

「人という身体を軸にした天秤計(ばかり)」

「左に義(正しい事)と理(ことわり)の皿が各一計二つ」

「右に情(なさけ)の皿が一つ」

「左右2:1で皿が釣合っている」

人は身体を挟んで「義」「理」と「情」の間を行ったり来たりして釣合いを取っている。 しかし「情」は其れ一つで「義」「理」二つに匹敵する程重い。

だから彼らは家族や友人の危急に接して故国に戻って行った。

自分のカリー道の師匠夫妻も当店の従業員も元はネパールからの難民です。

しかし彼らは皆、我々今の日本人が失っていしまったものを持ち続けているとても立派な 人達だと思っております。

野望が生む焦り



以下は自分の観察による私見です。

或る大国がある国に「社会正義」を犯して武力侵攻をした。

その「不正義」を犯す大国に武器供与をしようとする隣の大国に「人道的見地」から世界が疑義を唱えた。

「なぜ蛮行の手助けするのかし

その隣国にしてみれば侵略された国が「民主化」されては困るからでしょう。ましてや侵略 をした国自体が「民主化」されては更に困るから。

何故らなら己が周りにある「考えを同じくする」緩衝帯がなくなって自国が丸裸になってしまうからです。

しかしやっている事自体は「社会正義」に反する事ですから反対陣営の「頭目」がそれを「思い止まる様 | 説得を試みた。

無論世界の大国同士の会談ですからその中身は公表されませんが、その会談の後の説得を 試みた陣営の報道官がこう申しておりました。

日く

「(あなた方は) 自らの行動を歴史書にどう書かれたいか決断しなければならない」と。

そして別のメディアが是とは別の話として

この会談で「蛮行を黙認しサポートしよう」とする国の「頭目」が

「一部動揺する場面も見られた」

と報じておりました。

その二つの報道に接し、ある想像が浮かびました。

この二人、即ち侵略した国の「頭目」とそれをサポートしようとする国の「頭目」の頭の中にあるのは「現状維持」や「現状後退阻止」ではなく、この蛮行の真因は

「後代の歴史書に帝王として名を残し、あまねく民から神よ、仏よと崇められる為には、何が何でも「自分一代で」事を為さなくてはならない」

という「手柄独り占め妄念と残余命とのせめぎあいからくる焦り」故ではなかろうか? 仮に「経世済民」に基づいて民の安寧を願う事が主眼なら何も自分一代に拘る必要は更々な く後継の何世代かに渡ってそれを為す発想があってもいいからです。

しかしこの二人にはその発想がまるでない。

要するに後継を信じてもいないし育ててもいない。

いや、むしろ自分以上の者が出てきてもらっては困るので芽が出そうになると早い段階で 摘んですらしまう。

そして

「兎に角何が何でも自分の手柄にしなくては意味がない」

という思いで頭の中がいっぱいになっている。

その妄念が判断を狂わせ通常なら軍事兵法の真髄

即ち「戦わずして勝つ」

その第一は「敵を味方につける」外交

次には兵糧攻めにも似た「情報戦」「経済戦」

それをすっ飛ばして例の国はいきなり最下等手段である

「武力戦」

に打って出た。

そして又隣のお友達国も例の国の例の人同様にその焦りから上記二つを差し置いて最下等 手段の「武力戦」に近づきつつある様子が見て取れるので世界中が苛立ち始めた。

将に「大欲は無欲ににたり」

欲深さから焦ると結局は全てを失う(欲を抱かなかったのと同じ結果になる)が如し。 本件につき軍事兵法の真髄を教えてくれた嘗て軍人の亡き父はこう申しておりました。

「無欲は大欲ににたり」

欲をかかない方が得てして結果が良い

と。

(続) 野望が生む焦り の曲がり角



「何が何でも自分の代で」

というのは歴史、というよりも歴史「書」の存在を信じているからです。

それは同時に歴史書の「読み手」がいる事を信じているからでもありましょう。

更にはその読み手が「自分の側近や側近の命に嬉々として従う編者」と同じ評価をするもの だ」という無意識の前提があっての事でしょう。

しかしまず第一に後代の読み手が必ずしも自分の側近やその命に嬉々として従う編者と同じとは限りません。

次に「生者必滅会者定離」が世の常(=理(ことわり)であるなら読み手である存在がいっかな人類であっても、その「理からの例外扱い」は許されないとなれば、いつか人類は滅している事もありうるわけです。

もし人類がいないのであれば当然「歴史書」に意味等あろうはずもなく、更に申せば歴史そのものすら「認識する者がいない」という意味で「無かったも同じ事」になってしまいます。

(高度な知能を持った宇宙人、地球外生物がいてそれを解読出来うるのであれば別かもしれませんが、彼らの価値観が全く違えば矢張り無意味になるかもしれませんし)

となれば「歴史に名を遺す」為に嘘をつき事実を捻じ曲げながら権力闘争に明け暮れする 日々に虚しさを覚えませんでしょうか?

ましてやその野望の為に犠牲になる人々はたまったものではありません。

ある人物の「虎は死して皮を残す。人は死して名を遺す」だけ為に。

確かに人類が滅びるかどうかは我々には分りません。恐竜が蛇やトカゲのように爬虫類に 身を変えて生き残っている例もありますし。 しかしそれは確約されている話ではないでしょう。可能性や確率論の話でしかありません。 であるならば、今時点で確実なことを為した方が得策ではないでしょうか?

つまり現時点において不確かなことを追いかける様な虚しい時間の使い方をせずに

「今確実にあるこの生を十二分に生きる事を第一とする (アタマとこころと身体、三位一体のフル活用)」

とか

「それ自他ともに分かち合う努力をして現世を暮らし易くする」

とか、或いは

「いずれ滅びるかもしれない可能性があるとはいえ、愛情由来で成る丈長期に渡って後代 がより暮らし易くなる様に種まきをしていく |

とかに時間を使ってはどうなのでしょうか?

嘗て貧しかった頃のわが国では、親は子に少しでも楽な暮らしをさせようと頑張り、子はその姿を見て「自分が楽になったら、前払いの苦労分を後払いだが楽で返してあげよう」というエコサイクルが成り立っておりましたが、最近では

親は「自分の代だけ良ければいい」になり、子は「親が子に楽をさせるのは当たり前。死ぬまで面倒見ろよな」になり、今度は自分が親になると「自分の代だけ楽が出来ればいい。後代など知った事ではない」の悪循環。

そろそろわが国は曲がり角に差し掛かっているのではないでしょうか。

外国人と暮らしていると強くその事を感じるようになっております。

快適さ (amenity))



戦争というのは尊い人命や人権を著しく損傷するという意味でもひどいのですが、実は昨今問題になっている地球温暖化の元のCO2排出という意味でもひどいことがわかってきました。

ミサイルに爆弾、重火器に戦車等が CO2 をそこいら中にまき散らすからです。

例えば戦車は乗用車のガソリン満タンレベルではほんの数十メートルしか進まないのだそうです。何しろ鉄の塊ですから矢鱈目ったら重たいし、滑りのいいタイヤの代わりにわざと滑りを悪くして地面を鷲掴みにして進むキャタピラーをはいてもいるからです。

ですから戦争というのはこの二つの面でばかげている訳です。

一方話は変わって上述の中の CO2 のお話を致しますと、以前自分が書いた記事の中で 「産業革命以降人口が爆発的に増えた為に地球環境との利害相反関係が発生する様になった」

旨のお話を致しましたが、単に人間の数が増え、吐き出す息の CO2 量が増えた事で地球温暖化が進んだというイメージを持たれた方がいらっしゃいましたら、それは自分の説明不足によるものと思われます。

もしそう捉えられたとすると、変な話

「だったら口数を減らせ」

という妙な方向に向かってしまうからです。

下手をすると

「口数減らしという意味では戦争は逆に人類存続の必然だ」

みたいな変な話に。

しかし人類の数が 75 億になっていても、人の口から吐き出す CO2 量等というものはたかが知れているのです。

問題はその75億の人間が吐き出すCO2量の総体ではなく、75億の人間が必要以上の「快適さ (amenity)」(=お手軽簡単便利、全て自動でお任せ。以心伝心黙って座れば相手が察してしてくれる)を求め「過ぎる」事で発生するCO2量にある様な。

例えば、最早快適さというより特に先進国で生活の奥深くに根差してしまっている車、冷暖 房機器、照明都市など。最近では仮想通貨(暗号資産)のマイニング(掘り起こし)に膨大 な電力を使う事が報告される様になりました。

ですが、ここまで生活に根付いてしまったものや、これから根付きそうなものを

「だったら全部やめにしろ」

といっても非現実的でしょう。

ましてや戦争や感染症の長く憂鬱なトンネル明けにはそのリバウンドとしてそれ以前より 上記の消費量はさらに、あるいは一時期爆発的に増える場面においては。

そんな中で

「快適さを求めるな」

等と言ったら袋叩きにあってしまいそうです。

「やっと解放されたのに、何妙な事を言っているんだ、このアホは」

と言われるのが関の山。

ならばどうすればいいのか?

明確で具体的な「これだ」という答えはまだわかりません。

ですが、一つだけ言えるとすれば

今までの「快適さの概念とエネルギー消費量の関係」を是非とも新たに考えてみる必要がある。

(その答えをきちんと出さないと戦争や地球からのしっぺ返しで人類は今度こそ正真正銘の「存亡の危機」を迎える羽目になりそうだ)

という事だけはひしひしと感じて居る処でございます。

快適さ (amenity) 2



以前の記事で

産業革命以降医療や食料の大量生産も可能になり人口が爆発的に増加したがその人口の爆発的増加による呼気(口数)の CO2 排出量は我々の全ての土台となっている地球環境に対してはそれ程致命的なものではない。

むしろその口数だけある個人毎、場面毎或いはそれらの反復回数毎に生じる「快適さへの欲求」を満たす装置のエネルギー消費量の方が遥かに問題ではないか?

という主旨のお話を致しました。

又それ以前の記事で

現下我が国では何の疑いもなく金科玉条の如く言われている「安心安全が第一」もその度が 過ぎると却って温室育ち的なひ弱さが勝り始め、却って危機対応能力との間に反比例的相 関関係を生む可能性がある

事もお話し致しました。

日く

「安心安全が当たり前で育った人が天変地異や戦禍災禍に遭遇した場合、余りの想定外による混乱と、対応訓練機会や経験数(=免疫性)の欠如により成す術がない」と。

そこで本日のお題は

「その回避策の探索|

で御座います。

僭越ながら結論を先に申上げますと

「快適」ではなく「適快」を求める必要がありそうだ、と。

どういう事かと申しますと

「適快」とは「適度な快適さ」の略で「快適さの追求も程々に」の意味であります。

ここで申上げております「適度な快適さ」というのは、現時点現世界の価値観に基づいたエ

ネルギー量の抑制を指しておりますが、人間というのは一度味わった「快」を早々簡単には 捨て去る事ができませんから、こういった現時点現世界の価値観に基づく以上「抑制の強要」 は「欲求不満や不完全燃焼感」を引き起こし兼ねません。

では、どうすればいいのか?

答えは

「快適さ」の「心理的体感的な基準」をシフトさせる事。

つまり

今でいう「快適さ」とは「黙って座ればピタリと当たる」的な「全てお任せ」の「上げ膳据え膳」がよしとされておりますが、一方では是がこのまま進んでいけば人間そのものの本来能力はどんどん退化していき、最後には創造性のまるでない「上げ膳据え膳で遊ぶだけが日課のゾンビ人間」が出来上がってしまいます。

しかし直近の傾向を紐解けば現代人は「受動性娯楽の権化」の様なテレビ主体の生活から自分で操作し探っていく「能動性機器」であるパソコン、スマホ主体の生活に代わってきた経緯もあります。

要するに人間には「自発性」「参画性」があるという事。

であれば「求める解(=快)」は全てを相手任せにせず

「半分は装置で残り半分は充足感由来に自分で」

に改める。

換言すれば

「快適さ発生装置エネルギーを現在比半減し残り半分を自発性に基づき手間暇を厭わず自分のアタマとこころと身体の三位一体活用で賄う」

方向。 例えば

年配者は極力近隣での買物に自家用車を使わず歩き

周りの変化を楽しみつつ身体機能活性化を図る。

若年では直ぐには auto や AI に手を出さず

「まずは」自らの推理推論機能を働かせ自分の頭で考え始める。

等を

「舵切事始策」に image して居ります。

ひょっとして逆?



「ひょっとして我々はその意図に反して全く逆の方向に進んでいるのではないか?」 不図そんな疑問がわきました。

例えば

AI は人類進化の大成果という見立てとは裏腹に現代人個々の能力は古代人に比べて明らかに落ちていはしないだろうか?

火を使う事を初め身体能力を飛躍的に拡大する「道具類」を発明した古代人。その流れで巨大ピラミッド工法を考え付いた古代人。鉄の製法を見出した古代人。言語を発明した古代人等と比すと現代人は全て代役に丸投げの代役任せ、代役依存で、明らかに当のご本人は頭を使わなくなっているしパワーも落ちている。

例えば

狩猟生活の後に農耕生活を見出し、その後農林水産業が1次産業。産業革命以降工業化が2次産業。サービス産業が第3次産業となったのを経て、今や情報産業である第4次産業社会となっている。

人によっては 1 次から 3 次産業までを足して 6 次産業社会と言ったり、4 次産業迄を足し上げて 10 次産業社会と言ったりもしていますが傾向としてはその次が 5 次産業(まだ何になるかはわかりませんが)とどんどん積上げていく方向に進んでいる様に見える。

しかし是を今少し精査してみると、1次と2次産業が現物有形産業であるのに対して3次と4次産業は概念無形産業とでもいえるものになっている事に気づかされる。

3次のサービス業といえば我々生活者は飲食業や宿泊観光業等を思い浮かべ勝ちですが、その規模や重要性から言えば金融業が何といっても代表格。

そして 4 次の情報産業といえば言わずと知れた GAFA(M)に代表されるテクノロジーの独 占によって国家規模をもしのぐ超巨大 IT 企業群。 この 4 次の IT が 3 次の金融を動かし 3 次と 4 次の無形概念産業が相まって 2 次と 1 次にリクエストを出し規定しているのが現代。

しかしこのリクエストや規定の出し方を間違えると大変な事に成りかねません。

昨今話題の軍需産業は基本的には2次ですが実際には4次のIT産業や3次の金融業と結びつき過去の2次産業とは全く別のものになっていそうな。

いや、ビッグデータや深層学習を通してマーケティング概念や行動心理学をも巻き込み質 的に全然違うものになっている。

株式証券投資に代表される3次の金融もITというテクノロジーを噛ませたアルゴリズム超高速取引が主体となっておりますし又Fintech(金融工学)なるものも誕生しており古来育てたい事業体に投資するのが本意だった株式証券投資が今やそういった意志や意図とは無関係に「金儲け最適解自動生成機械」となって独り歩きしだしている。まるで糸の切れた欲望の怪物リバイアサンの様に。

この流れは正しいのか?何か不気味。

ひょっとしてこれは間違いなのではないか?

方向としては 1 から 10 へ向かう産業次元積上げで方向はなく 3,4 次の在方を考え直して「より地球 (planet) に親和的な逆方向 1,2 次産業への回帰的再構築」方向なのではないか? そんな気がしてならない昨今で御座います。

In front of our restaurant 4



In front of our curry restaurant today.

人質?



余りにも恐ろしい想像で迷ったのですが。

我が国の全ての若い母親がという訳ではなく、30 代位の著名都市部郊外住宅地在住、高学 歴専業主婦において顕著な傾向で

スマホばかり見ていてベビーカーの子供の顔に一度も目をやらない。

その子供に話しかけもしない。

並んで歩かないし抱きしめもしない。

「外国の親子と違うのは何でなんだろう? |

とずっと不思議に思っていたのですが或る時唐突に

「人質|

という言葉が思い浮かびそれで合点がいきました。

正しいかどうかの判断以前にそう考えると全ての点で辻褄が合うと思ったのです。

悪条件消去法で「自由恋愛もどき」の結婚をした。

そろそろ行かないと格好悪いからか?働かずに自由時間を楽しめるからか?旦那さんには 高値で売り付け、仕えさせ、女子会の軍資金提供者にする積りだったのか?

は知りませんが色々な打算の末に兎に角結婚をした。

しかし元々相手に惚れてした訳ではなく単に悪条件消去法の適用結果に過ぎないのでそも そも乗り気でも熱がある筈もなく出来れば旦那さんとは距離を置きたいのが本音本心。

しかしこの魂胆に相手が気づいたら幾ら何でも身分の保証はされまい。

なので、仮にそう感づかれたとしてもおいそれとは別れられない強制的な状況を作らなく てはなるまい。

自分の母親や同世代の高学歴な女友達がした様に。その自分の母親との日頃の作戦会議で 決めた通りに。 という事で「子は鎹(かすがい)」ではなく「子はこれからの己が身分保障の担保」として 作った。

それが別名「人質」

相手の親や何かのきっかけで離婚する羽目になった時の交渉優位保持材料としてはぜひと も必要だし、

話の弾まない夫との気まずさの緩衝材として、或いは「子供の世話で忙しいから」という合理的エスケープの材料としても必要だろう。

しかし人質を得たものの、元々人質なのでまずは「逃げられては困る」

本来なければ無しで済ませたい人質なので「手間をなるたけ省きたい」

かといってあまりに邪険に扱いすぎると世間様からの「国際人道法上の問題」を誘発しかねないので表向きはそれなりに丁寧に扱う。

例えばフード付きチャイルドシート付自転車を乗り回すとか。

ですがそれは見せかけの体裁だけの話でしかない。

元々が人質なので「元来帰属権はあちらのもので面倒を見る主体は相手方にある」

だからスマホばかり見ていて声もかけず抱きしめもしない。

できれば「担保権だけ残して子供には消えてほしい」

というのが本音本心。

そう考えますと疑問に思っていた不可解な行動の全ての辻褄が合いました。

しかし是が本当だとすると何ともはや恐ろしい世の中になったものです。

どこやらの国の侵略行為や無法な人質作戦が、そこまで悪辣ではないにしろ我が国のそこかしこで人知れず日々起こっている。

侵攻されたその国の何の罪咎もない人達同様、本人の意思を無視して交渉の盾にされた我 が国の子供達も又、気の毒に思えてなりません。

鳥語 (人間外言語)



男性は女性の容姿に惹きつけられますが、女性はどうも男性の容姿は二の次で他の何かに 惹きつけられている様です。

「何であんないい女があんな不細工なのと付き合ってんだ?」

というあの謎の現象です。

確かに高校生位迄は男子の容姿にキャーキャー騒いでおりますが高校を卒業する辺りから 何かがゴロっと変わってしまう様です。

自分は女性ではないのでそれが何なのかは分りません。

ところで話は変わりますが最近自分は帽子を被りアタッチタイプのサングラスをし、マスクをかけて歩いております。

理由は白内障で外光が眩しくてならずその為に帽子とサングラスをしており、マスクは言わずと知れたコロナ感染症対策。そうしてお店の行きと帰り、ひたすら歩いているのは抗体が強すぎてワクチンを打つとアナフィラキシーになる恐れがあるのでワクチン接種を一度もしていないからです。

感染予防としては人混みを避けるしかなく、結果公共交通機関を殆ど使わないからです。 自転車も白内障の関係でこれまた危険なので NG。

結果只々てこてこと歩くしかない訳です。

しかし上述のその姿が人間様にはヤクザのヒットマンかスナイパー (狙撃兵) にでも映っている様で、大抵の善良なる市民の皆様方は自分の姿を見かけるとそそくさと足早に自分の脇を通り抜けるか、人によっては反対側の歩道に移ったりします。

ところがこれら人間様の反応とは違って、何故か犬は尾ッポを振って近づいてきたり、鳥は 逃げないでじっとこちらを見ていたりします。

人間様には怖く見える自分の一体どこを見て連中が「親しみと思しきもの」を感じているのか、これまた犬でも鳥でもない自分には分りません。

そういえば今日、お店の朝の準備を終えた後、自宅に帰る道すがらいつもの森林公園を通り 抜けた折にある事に気づきました。

Bird singing

英語では鳥の囀りを上記の様に「鳥は歌う」と表現しますが、よく耳を澄まして聞いている と鳥たちは歌っているのではなく「会話している」ように聞こえたのです。

距離の離れた木に鳥が夫々留まっている。

片方が囀ると、もう片方が囀り返す。

しかし、最初の鳥が囀った囀り方と後で囀り返した鳥の囀り方が違っているのです。

更に耳をよく澄ましてみると同じ鳥の囀り方も何かいろんな調子の囀り方の組み合わせでできているのが分かってきました。

Bird speaking to each other with bird language

そんな感じでした。

再び勿論、鳥ではない自分にはその会話の中身迄は分りませんでしたが。

しかしこうしてみると日頃「こうだと思い込んでいる」世界の他に実はまるでパラレルワールドの様に全く別の世界(観)が同時進行重層的にあるのに気付かされると何だかとても新鮮で得をした様な気分になりました。

ひょっとしたら草木にも言語があるのかもしれない。

ますます面白い。

世界は会話(交流コミュニケーション)に満ちている。

男だけ、人間だけの見方ではつまらないし勿体ない。

そう思いました。

新説「うさぎと亀」



外国人は素直に相手の成功を喜びますが我が同朋は殆どの場合表向きはともかく相手の成功を心から喜ぶ事は少ない様に思えます。

例えば我が国代表のオリンピック選手やノーベル賞授賞者等明らかにレベルの差が歴然で 自分との利害関係がまるでない様な場合を除いて、大抵は「この人に対して利害関係が何か あるんだっけ?」という様な範囲の人に対して迄その成功や威風堂々、明眸皓歯を喜ばない 傾向がある様に思えます。

簡単に申せば「通りですれ違うだけの行きずり人に対してさえ敵愾心を燃やす」傾向です。 しかしなぜこの様な事が起こるのか?

色々考えて二つばかりその要因を思いつきました。

例によって正誤は分りませんが、そう考えると「辻褄があう」というレベルです。 まず一つ目。

多くの我が国国民諸氏は

「生まれながらにして自分は相当高位の人間である」

と無意識に思い込んでいる。

逆の言い方をすれば

「殆どの人は自分より下位である」

と見做している。

そうした人に以下のような事態が起きた場合どうなるか?

「圧倒的に下位だ根拠なく決め付け歯牙にもかけなかった存在」が気が付くとかなり間近 に迫っている。次に見ると自分と並んでいる。 当然油断していたその吾人は「そんな筈はない」慌てふためきます。と同時に自らのプライドにかけてその相手を引き摺り下ろそうとします。

迫っていれば蜘蛛の糸のカンダタよろしく蹴落とそうとし、並んでいれば脇に弾き飛ばそ うとし、先を越されれば自分の位置まで引き戻そうとする心理。

自分が高位であり下位であると思っている人間の数が多ければ多い程この事態は頻繁に起こります。

先に申し上げました通り「通りすがりの道端の相手に対して」すら、です。

そして二つ目。

この高位、下位という、謂ってみれば一種の「序列」の発生(発想)は価値観や価値体系の 数が非常に限られたものである場合に起こります。

同調圧力の磁場が相当レベルな我が国の場合の様に。

これは選択肢が限られて候補者が集中し混みあっている状態です。

他に選び様がないので「失っては大変。出遅れは命取りになり兼ねない」という心理が働いて競争が生まれ、次には激化し、そして益々視野が狭くなって他に選択肢ある事すらわ捨ててしまい、当然探す事等全くない儘、後はもう只々「序列の高位先取り合戦」にのめり込んでいくだけになる。

ならばこの傾向をどうやったら解消できるのか?

答えは「価値観の多様化」

一本道での競争をやめ歩き走る道を何本も設け、理想的には夫々の道のランナーを一人に して競争をなくす。そしてお互いの道を認め合い、時には相互にコラボしあう。

これをうさぎと亀の寓話に準えて申せば

「油断したうさぎが愚かな敗者で地道な亀が賢い勝者」

という教えを

「うさぎはうさぎ。亀は亀。夫々の道を歩けばいい」

と書き改める。

比べ様がないので常時

「隣は何をする人ぞ?」

と神経を尖らせなくて済みますし。

お門違い



なぜ皆そう「不機嫌な顔」をしているのか?

なぜそう「ブンむくれた」顔つきなのか?

なぜ縁もゆかりもない第三者に「八つ当たる」のか?

こちらからは何も言わないが以心伝心、まずはそちらから気付いて痒い処に手が届く様な 「上げ膳据え膳」の対応をして呉ないから?

誰よりも自分に「目をかけ」て呉、無条件に自分を「特別扱い」しないから?

子供の頃の父母同様「王子様お姫様」扱いして呉ないから?

に一言申上げます。

「アホか、てめぇ。んぅな事ある訳なかろうが」

と。

そう。この世の一般人である我々にそんな事がある訳がないのです。

「いつか白馬の王子様が自分めがけて来る筈よ。

ウルトラ美女のお姫様が現れる筈だ。

どこやらの見識ある偉いさんが向こうから手弁当で自分を探し当て無条件にその場で一括 決済の上、取り立ててくれる筈だ。

何せ自分は「特別な存在 | なんだから |

という根拠なき確信を抱いているのかもしれませんが、そんな事、起こる訳がありません。 待てど、暮らせど、来る訳も起り得る訳もないので、待っているだけ時間の無駄というもの です。

見識ある周りの人達はその事に既に気付いているにも拘わらず、その見識自体が邪魔をするのか何故か「裸の王様みたいな状況の当のご本人」に注意を促す事をしないので、表向き何も起こらない様に見えますが事態は密かに益々悪い方向に進んでしまいます。

そしてある日、このコミュニケーションロスが臨界点に達した時に突如「爆発」が起きる。

長ぁい、長い導火線の先の爆弾に火が付き、そこいら中を巻き込んで一気に被害が広がる。 初めの意地悪が犯罪になった瞬間。

第三者被害が無差別被害になった瞬間。

導火線の初め1センチでカットしておけばこの様な事にはならなかったかと。

事件後幾ら爆発した爆弾の周りにその原因を探しても見つかる訳がない。

導火線の端っこは爆発地点から 100 km離れた処にあり導火線の燃えカスは既に風に流されて痕跡すらなくなってしまっているのだから。

「お門違い」

門の前で中から招き入れられるのを待っていると思しき人に

「ここはあなたがお探しの家ではありませんよ。多分お門違いだと思いますから、他を当られてはどうでしょうか? |

と赤の他人に対してとはいえ一言「誤認識の修正と可能性の棄却」を促すお節介をしていれば事態は避けられたかもしれません。

そのお節介を現代社会では

「小さな親切大きなお世話」

と呼んで忌嫌いっておりますがひょっとして

「小さなお世話が、大きな親切」

であるかもしれない世の中に代わっている様な気もしております。

「小さな親切大きなお世話 |

こそが、逆に世の中をミスリードした「お門違い」な過大解釈の誘因であった様な。

そもそも、関係のない第三者が起因となる惨事は数多存在します。

赤の他人だからどうでもいいという事はないのです。

予防的危機管理の面からは常に認識野に遡上しておく必要を強く感じます。

2022/4/13

特に昨今は。

私事:臆病故の危機管理

(添付は故事:杞憂の図)



「危機感の有無が危機回避の有無ともなる」

危機感の度合は想定する範囲の幅 X 実感の深度で決まります。

想定幅が狭く実感も浅薄であった場合、実際には危機が存在するのに「危機がない」と思ってしまいます。

実は是が一番危険な状態で大抵の場合実際に危機が起これば全てが後手、後手で中原中也 風に申せば

「為すすべもなく日が暮れる」

状態になってしまいます。

以下は自分の話で誠に恐縮なのですが自分は大変な臆病者でちょっとした事にも直ぐにビ ビってしまう傾向があります。

子供の頃は夜、トイレ行くのに「闇の中に潜んでいるかもしれない幽霊」が怖くて一人行けず必ず母についてきて貰っておりました。

原因は「想像力過多」

そういえば聞こえがいいのですがどちらかというと「妄想癖」に近い様な気もします。

うつ病初期に心理テストを行った結果「想像量が人の3倍位ある」事が分かったのですが、

うつ病時期で3倍なら平時だったらいったい何倍だったのか?

3倍位なら「想像力過多」でしょうが5倍とか6倍にでもなっていたとすると是はもう「無いものが見える妄想癖」の類になっていてもおかしくはありません。

実は明日、自分は予約を申し込んでから7か月間待たされた白内障の手術を受けるのですがこの手術が怖くてならないのです。

「白内障の手術なんてものの 10 分ですむよ。殆ど失敗もないし病気の内に入らないよ」 と人様からはよく言われるのですが、自分は手術そのものよりも例えば

「手術中に首都圏直下型地震が起きたらどうしよう。揺れで先生の手元が狂ってメスが目 にグサッとか!

とか

「某独裁国が某大国に存在誇示のためにミサイルを発射したらどうしよう。直接某大国本 土に打ち込んだらヤバいので取り敢えず相手の出方見に近隣の我が国にテスト的に打ち込 んできたらどうしよう |

とか、そんな想像が現実問題として浮上してくるのです。

昔太宰治のエッセーだか何だかで

「電車と駅のホームの隙間等に落ちっこないのに自分にはその幅が大河の様に思われ確実 に間に挟まれる妄想」について書いておりましたが将にそんな感じなのです。

自分は物を書くのが大好きなので目が見えなくなったら「死んだも同然」になってしまいます。

なので、

「そうなったらどうしよう?音声入力を学んでおく必要はないか?」

とか

「売上のデータ集計は?外国人スタッフは PC 不如意だから是も音声入力でやるしかないか?」

とドンドン話が発展していってしまいます。

危機に対する想定の幅もさりながら実感度の深さがかなり掘込まれている様なのでほぼ現 実に起こるものとして織り込んでしまうからです。

「幽霊の正体見えし枯れ尾花」の正体が「枯れ尾花じゃなかったらどうするの?」 が危機管理の出発点なのです。

追記)

我々の歴史はむしろその当時「あり得へん」と思った想定外方向へと流れ続けてきた。 恐らく今後も。

なので、

決して杞憂と疎かにしませぬ様。

十把一絡げの害



「杞憂を小事に当て嵌めてばかりいるから皆「又言ってらぁ」とウンザリし本来抱くべき先の大事への杞憂をも十把一絡げで捨て去ってしまい、結果本当に大事が来た時に成す術を持たない」

この 2 年余りコロナ禍はじめ地政学的リスク、気候変動による災禍を経験してきて感じたのは上記の内容でした。

思うに我々はどうでもいい様な些末な事に徒に目くじらを立て口角泡を飛ばす事が多い反面、肝心要の大事に対しては無関心又は無頓着、多少気になった場合でも出る釘は打たれる、触らぬ神に祟りなしで「見て見ぬふり、気付いて気付かぬ振り、知って知らぬ振り」の「見ざる言わざる聞かざる」を決め込む傾向がある様な気がします。

おそらく是は

「所在責任の軽重に関係がある」

気がしております。

即ち

「どうでもいい様な些末な事=責任軽=目くじら口角の泡出現回数多」 「大切で重要な事=責任重=沈黙又は逃げ腰で目くじら口角の泡出現回数少」 と。

具体的にはマスク警察、CO2 削減の為のレジ袋不使用比率議論は前者。CO2 のみに関して 言えば

「削減の為近隣への自家用車での買物禁止」「CO2まき散らし装置である戦車、大砲、ミサイルの使用禁止」が後者。

前者への議論は異常な程に盛り上がりますが後者に関する議論は稀にしか起こらない。 しいてその理由を今一つ申せば 「火の粉が降りかかるから」「身銭を切らなくてはならなくなるから」要するに自らにも痛みが伴う事になるからでしょう。

なので、仮に議論に参画したとしても決して「提案側」には立たず「チェック側」に回る事が多い様な気がします。

この傾向は文系インテリ層によくみられるものです(因みに大卒が全てインテリなら自分 こそ文系インテリそのものですが)

一言でいうと

「いうだけ言って責任は取らない」「身の安全を確保した上で高い処から抽象的な指示を出す」傾向。

「身の安全を捨て具体的な指示を出して最後の責任は己が取る」 のとは正反対。

「肚座り」の軽重差です。

話は変わりますが冒頭と上記の議論を耳にしているとある特徴に気づかされます。 即ち

「発言回数が多いのとは裏腹に出所は一つでそれを手を変え品を変えして言っているだけ」 その生成過程というのは次の様な流れである気がします。

「十把一絡げで「一」に抽象化し、今度はその「一」に対する光の当て方を変える事で恰も何種類もの視点がある様に見せながらその実「一」を使って十把一絡げに切り捨てている」 そして是を

「鋭い切れ味、快刀乱麻の視点」等と誉めそやす。

しかしそもそも全ては一品一様が道理ですから十把一絡げでは取り零す量が多すぎます。 結果、的を射たものが何も見つからずに時間切れが迫り、慌てて取った間に合せの解で誤っ た方向に進んでしまう。

「抽象」が十把一絡げの「捨象」であってはならぬ由縁です。 捨象とは手足をもいで頭だけにするのと同義。

国語辞典ではそれを「頭でっかち」と記しております。

経営会議確認事項



平時ならざる緊急時に

「どんぶり勘定」是は受理。

「十把一絡げ」是は不受理。

「どんぶり勘定」は量差で損益管理事項。

「十把一絡げ」は質差で経営(理念)管理事項。

前者は運用の範囲で済むが、後者はその誤判断が後々の存亡に関わる事項故「目先の欲に目をくらませた」安易な判断、決して是をすべからず。

元凶は何?

価格転嫁が追いついていない			
国・地域	企業物価 (%)	消費者物価(%)	差 (ポイント)
日本	9.7	0.9	8.8
米国	10	7.9	2.1
ユーロ圏	31.4	5.9	25.5
中国	8.3	1.5	6.8

(注)前年同月比の上昇率。差は企業物価から消費者物価を引いたもの。中国は3月、それ以外は2月の数字

我が国の「企業物価(事業者への卸物価)」が 9.7%上昇したとの記事。是は 1982 年以来実 に 40 年ぶりの上昇幅だと。

外国では米国が 10%、EU(欧州連合)が 31.4%、中国が 8.3%上昇。

是だけ見ると我が国はロシアにエネルギーを依存している EU の特殊事情を除けば企業物価の上昇率は諸外国並みに見えます。

一方企業から商品を買う「消費者物価」の上昇率は我が国が 0.9%,

米国が 7.9%、EU が 5.9%、中国が 1.5%となっており諸外国の中で消費者物価の上昇率が 一番低くなっております。

一見すると我が国国民が一番恵まれた環境にいる様に見えます。

ここで自分独自の数値を示します。

それは消費者物価上昇率を企業物価上昇率で割った数値=企業物価上昇の消費者物価への 反映率です。

是で見ると我が国は反映率 9%、米国が 79%、EU が 19%、中国は 18%ありました。

「企業が頑張って消費者の見方をしているんだから誠に結構なんじゃないの?」 と思われるかと思います。

それは是迄の我が国メディアの論調にも表れていて

「30 年間価格の上がらない卵は物価の優等生」だとか「インフレにも負けず価格を据え置 く消費者の味方、●●食堂の▲▲さん」とか言った記事を皆様方も過去によく目にされたか と思います。

此処で話は180度変わります。

企業の卸受入価格が上がっているのに消費者購入価格が上がらないという事は、それだけ 企業がロスを出している事になります。

するとその企業はロスを減らす為に仕入価格以外の経費を削る行動に出ます。

例えば光熱費の削減。出張の抑制。広告回数の抑制等です。

是だけならまだいいのですが経費の中の最大は人件費です。

当然企業はこの最大牙城に目を向け次には手を付け始めます。

それで何が起こるかと申せば給与カットや人員の削減です。或いは新規採用のストップ。 企業物価が上昇してもそれに連動して適切に消費者物価が上昇していれば(つまり反映されていれば)まともな経営者が運営する企業であればこうした「不幸な事態」は起こりませ

なぜなら消費者物価の上昇で、同数の販売であれば少なくとも収入の最大値である売上高 が上昇し収益を圧迫しないで済むからです。

米国がそのいい例でしょう。又 EU も苦しいながら 19%は消費者物価に反映され、あの物価統制の厳格な中国でさえ 18%が消費者物価に反映されております。

その理由として諸外国の消費者の頭の中には「企業就労人(生産者)」は家庭に帰ると「消費者」となりその消費者は職場では生産者となる。即ち生産者と消費者は同じ人間の両側面に過ぎない(立位置の違いに過ぎない)という認識が実感として確立されているからの様な気がします。

しかしわが国では同じ人間の両側面でしかないにも拘らず何故か消費者と生産者が分断され爾来「敵対関係」として認識されてきた様です。

結果、一見得をした様に見えて実は大損の元凶を作り出していた可能性がないでしょうか?

首を絞めていたのは他ならぬ自分自身だった可能性。

著者プロフィール)

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴 (うつのみや かずたか)

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのk。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢 えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ:http://utokyu.co.jp

(出版情報)

著 者 うときゅう いっき

発行人 宇都宮一貴

発行所:株式会社うとQ

〒二一五 - ○○一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東5丁目34番7号

電話:〇四四 - 九八九 - 一六九八

発 売 株式会社 うとQ

編 輯 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

カバーデザイン&DTP 製作 ナレッジフォレスト (大竹鉄哉)

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日:二〇二二年四月十四日 初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、

複製することは禁じられています。

(その他著書)

- ●「人生終わったなと思った時に読む本」(二○一五年刊 ソフトカバー在庫僅少)
- ●「人生終わったな」と思う間もなくトンネルの闇を抜けて広野原(二○二○年刊 amazon

kindle)

- ●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二 ○二○年壱月の巻~十二月の巻」(二○二○年刊 amazon kindle)
- ●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「二年目の ニューノーマル探索サバイバル日記」二○二一年一月の巻~十月 最終巻 」(二○二一年刊 amazon kindle)
- ●コロナ渦 初年度 カリー屋ナマステ別巻堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」 (二○二一年刊 amazon kindle)
- (初本) カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」(二○二○年刊 amazon kindle)
- (改訂本) カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」(二○二○年刊 amazon kindle)
- ●コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「子、親を選べず」三部作(二○二一年刊 amazon kindle)
- ●コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集(合本)「子、親を選べず」新四部作 (二○二一年刊 amazon kindle)
- ●コロナ渦 カリー屋ナマステ別巻堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」
- 二〇二一年 上半期(合本)
- (二〇二一年刊 amazon kindle)
- ●コロナ渦 カリー屋ナマステ別巻堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記 |
- 二〇二一年 度(合本)
- (二〇二一年刊 amazon kindle)
- ●ネパールカリー屋「ナマステ」別館堂&英語教室「すすき野留学」主人辞書を置かない考える英語教室「前座の英語」Pre & Prep. English 第1集~第7集) (二○二一年 ~ 二○二二年刊 amazon kindle)
- ●線路は続くよ、何処までも 野を越え山越え谷越えて その一、その二 (二○二一年刊 amazon kindle)
- ●線路は続くよ、何処までも 野を越え山越え谷越えて 合本
- (二〇二一年刊 amazon kindle)
- ●短編小説「明暗明暗 |
- (二〇二一年刊 amazon kindle)
- ●うつ病ドロンパッ読本
- (二〇二一年刊 amazon kindle)
- (改訂原本) 声あげ Is it true?
- (二〇二二年刊 amazon kindle)

●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用しております。当社には著作権、版権は全くない事を明記させて戴きます。